

脆弱性をめぐる倫理の一側面

早川 正祐（東京大学）

私たちの多くは、少なくとも人生のある局面で、他者が抱える混沌とした苦しみに出会い、それに圧倒されるような体験をする。そして、そのような状況の中で、「相手の苦悩を共有できる」「相手の立場にたてる」といった自らの甘い見立てが厳しく問われるということもまた体験する。

たしかに、「苦しみは共有できないものだ」と決めつけるのは危険だろう。それは共有への誠実な努力を虚しいものだと思わせ、他者の苦しみに対する投げやりな態度を助長しかねない。だが同時に、「苦しみは共有できる」と何ら躊躇いなく言い放つこともまた危険だろう。というのも「私の苦しみは共有しえない」という当人の痛切な感覚——払拭しがたい隔絶感や孤立感等——こそが、苦しみをその内側から形作っている当のものかもしれないのだから。

本発表では、病いの体験における共苦（苦しみの共有）の困難さの一端を見たうえで、病者の苦しみの表現を「証言」として捉え、その証言という概念がもつ奥行きから、共苦の可能性を少しばかり探りたい。